検査カードの数値の食い違いを不問にする代わりに、監視カメラの真下で確認を受けて、署名した検査結果が朝の読み合わせで読み上げられ、検査が終わったあとも自分の手で専属の名簿に名前を書いて、道具部屋の合鍵を一つ渡したままの厩務主任の俺

R18

2026・11・12

目次

第1話　検査カードの食い違い
第2話　署名欄

第1話　検査カードの食い違い

朝は四時半に始まる。

厩舎の明かりをつける。

水を換える。

飼い葉を量る。

俺は柊庭鷹久。三十七歳。

この競馬場で厩務主任をしている。

十二年、担当の馬を一度も取り消しにしたことがない。

それが俺の誇りだ。

担当はセトノカゼ。オスの五歳。

脚は速い。

気は強い。

体は正直だ。

嘘をつくのは人間のほうだ。

朝の馬体チェックは決まった順でやる。

目を見る。

耳を触る。

首筋に手を当てる。

体温を測る。

四本の脚を上から下まで触る。

裏掘りでひづめを見る。

息の音を聞く。

セトノカゼの馬房に入った。

セトノカゼは顔を上げた。

鼻を鳴らした。

フン。

俺の手に鼻先を寄せた。

いつも通りだ。

体温計を入れた。
少し待った。
抜いた。

三十八度六分。

俺は目を細めた。
昨日は三十七度九分だった。
一昨日も三十七度八分だった。

昨日より七分高い。

もう一度測った。

三十八度五分。

下がらない。

セトノカゼは飼い葉を食べた。

水も飲んだ。

ふんも普通だった。
汗はかいていない。
息も荒くない。

様子見だと思った。

熱だけが少し高い。
走る前に下がることがある。
今すぐ報告すれば、検査で止められるかもしれない。
昼にもう一度測ってからでも遅くない。

そう思った。

検査カードに書く手が止まった。

本当の数を書けば、赤い印がつく。
昨日の数を書けば、何も起きない。

俺は昨日の欄を見た。
三十七度九分。

今日の欄に、三十八度一分と書いた。

嘘ではないと思った。

近い数だと思った。

様子見の間だけだと思った。

手が汗で湿っていた。

カードを板にはさんだ。

次の馬へ移った。

六時。朝の読み合わせが始まった。

調教師の館林がカードをまとめた。

伏見が飼い葉の量を読み上げた。

俺はセトノカゼの欄で口を閉じた。

何も言わなかった。

七時すぎ。
厩舎の入り口に車が止まった。
黒い車だった。
中央の検査部門の車だ。
ドアが開いた。
男が降りた。
御厨衛人。四十五歳。

馬体検査官。獣医師だ。
今回の開催の間だけ、ここに来ている。

背は俺より少し低い。
体は細い。
目は細くて、声は小さい。

御厨は挨拶を短く済ませた。
すぐに馬房へ向かった。

「セトノカゼから見ます」

俺の胸が鳴った。

ドクン。

御厨はカードを受け取った。

数字を上から下へ追った。

指が止まった。

今日の欄だ。

「三十八度一分」

「はい」

「いつ測りましたか」

「五時すぎです」

御厨は何も言わなかった。
馬房に入った。
セトノカゼの首に手を当てた。
耳の付け根を触った。
体温計を新しく出した。
「測ります」
俺は裏掘りを持つ手に力が入った。

体温計が鳴った。
御厨は数字を見た。
カードを見た。
また数字を見た。

「三十八度六分です」

厩舎の音が遠くなった。

「五時から今で、五分上がる馬ですか」

「いえ」

「下がることはあっても、この上がり方はない。朝の数を低く書きましたね」

言い訳が喉まで来た。

様子見だった。

食べていた。

水も飲んでいた。

どれも言えなかった。

御厨はカードに赤い線を引かなかった。

代わりに、小さく印をつけた。

「報告が遅れた理由は、後で聞きます。今は出走前検査の対象にします」

館林が顔を上げた。

伏見が俺を見た。

俺は頭を下げた。

「申し訳ありません」

御厨はその言葉を受け取らなかった。

「謝るより、数を正しく書いてください。書き直しは私の前で」

新しいカードを渡された。

俺は書き直した。

三十八度六分。

手が震えた。

御厨はうなずいた。

「昼に再検査をします。立ち合いは柊庭さん。夜にもう一度見ます」

「夜ですか」

「熱の動きは夜まで見ないと分からない」

それだけ言って、御厨は次の馬房へ行った。

昼までに熱は三十八度二分まで下がった。

それでも基準より高い。

館林は腕を組んだ。

「セトノカゼ、どうする」

「昼の再検査で決まります」

「お前が様子見したせいだぞ」

「はい」

伏見が小さい声で言った。

「主任、セトノカゼは元気です。朝も食べていました」

「伏見、そういう問題じゃない」

伏見は黙った。

俺はセトノカゼの首をなでた。

左前脚には触らなかった。

あの場所は見ないようにした。

左前脚の古傷の場所と程度は、俺しか知らない。

誰にも言ったことがない。

館林にも言っていない。

御厨にも言わない。

それだけは決めていた。

夕方、熱は三十七度九分に戻った。

御厨はカードに数を書いた。

出走は止めなかった。

「今回は様子見で通します。ただし夜の再検査は行います。二十時、道具部屋です」

「道具部屋ですか。馬房ではないのですか」

「馬はもう大丈夫です。見るのは馬ではない」

俺の背筋が冷えた。

「何を見るのですか」

「手入れの癖です。体温の測り方、脚の触り方、報告の仕方。主

任の体で確認します」

言い方は普通だった。

事務の言い方だった。

断る言葉が見つからなかった。

朝の食い違いがある。

カードに印がついている。

二十時。

厩舎の明かりは半分消えていた。

道具部屋は厩舎の奥にある。

ブラシ、裏掘り、バケツ、タオル、古い鞍が並ぶ部屋だ。

窓は小さい。

外からは見えない。

俺は作業着のまま入った。

御厨はもういた。

白いシャツの袖をまくっていた。
机の上に検査カードが置いてあった。
俺が書き直したカードだ。

「ドアを閉めてください」

閉めた。

カチッ。

鍵の音がした。
御厨が内側から鍵をかけた。
「再検査の立ち合いです。記録に残します」
御厨は椅子を指した。
「座ってください」
俺は座った。
机を挟んで向かい合った。

「朝、なぜ低く書きましたか」

「様子見だと思いました。熱だけ高くて、他は普通でした」

「普通かどうかを決めるのは、あなたではない」

「はい」

「次に同じことがあれば、出走は止めます。厩舎の評価も下げま

す」

「分かっています」

「分かっているなら、体で覚えてください。手入れは体で覚える仕事でしょう」

御厨は立ち上がった。

俺の横に来た。

「立ってください」

立った。

「手を見せてください」

両手を出した。

御厨は俺の右手を取った。

手のひらを表に返した。

指を一本ずつ開いた。

「裏掘りを持つ手ですね。親指の付け根が硬い」

指で押された。

痛くはなかった。

でも力が抜けなかった。

左手も同じように見られた。

爪の間。

手首。

腕の内側。

御厨の指は冷たかった。

俺の腕は熱かった。

「馬の脚を触る時は、この手で熱を見るんでしょう」

「はい」

「では、熱はどこで感じますか」

「手のひらです」

「やってみてください。自分の腕で」

俺は自分の左腕に右手を当てた。

御厨はその上から自分の手を重ねた。

「力が強い。馬はもっと弱く触るはずです」

手が滑った。
肘の内側まで来た。
二の腕まで来た。

シャツの袖が引っ張られた。

「袖をまくってください」

まくった。
肩の近くまで腕が出た。

御厨は肩を触った。
首筋を触った。
指が喉の横をなぞった。

ビクッ。

体が動いた。

「首筋は熱が分かりやすい場所です。馬でも同じでしょう」

「はい」

「シャツの前を開けてください」

「え」

「胸の熱を見ます。手入れの癖は胸の使い方にも出る」

言い方は変わらなかった。

小さい声。短い言葉。

俺はボタンを外した。

一つ。

二つ。

三つ。

胸が出た。

作業着の下は肌着だった。

「肌着も上げてください」

上げた。

腹が出た。

胸が出た。

冷たい空気が当たった。

御厨の手が胸の真ん中に置かれた。

平らに押された。

「息をしてください」

吸った。

吐いた。

手が右へ動いた。

乳首の近くまで来た。

止まるかと思った。

止まらなかった。

指先が乳首に触れた。

「あっ」

声が出た。

乳首が硬くなった。

触られただけで硬くなった。

御厨は指を離さなかった。
乳首を軽くつまんだ。
「ここは感じやすいですか」
「違います。そういう場所では」
「答えは体のほうが早い。乳首が立っています」

左の乳首も触られた。
親指で乳首を押された。
乳首の周りをなぞられた。

ゾクッ。

背筋に力が入った。
下腹が重くなった。

ズボンの中でちんぽが硬くなり始めた。

隠したかった。
手を下ろそうとした。
「手は横に置いてください。検査中です」
手が止まった。
御厨はシャツを全部脱がせた。
肌着も脱がせた。

上半身は何もなかった。

ブラシが机から取られた。

馬の手入れに使う柔らかいブラシだ。

「手入れの段取りで確認します」

ブラシが肩に当たった。

首筋から胸へ下りた。

胸の真ん中をなでた。

右の乳首の上をブラシが通った。

乳首がまた硬くなった。

「痛いですか」

「痛くは、ありません」

「では続けます」

ブラシは左の乳首へ行った。
乳首を何度もこすった。
乳首の先が赤くなった。

そのあとブラシは脇へ行った。
脇の下。
腹の横。
へその周り。

俺のちんぽはもう隠せなかった。

ズボンの前が盛り上がっていた。
ちんぽが布を押していた。

御厨の目が下へ行った。

「下も熱が上がっていますね」

「これは、違います」

「数値で言ってください。硬さはどうですか」

言えるわけがなかった。

御厨は椅子に座った。

俺を目の前に立たせたままにした。

「ズボンの前を開けてください」

「御厨さん、それは検査では」

「手入れで下を濡らす馬もいます。人の体も同じです。確認だけです」

「確認って」

「開けてください。朝のカードの印は、まだ消えていません」

手が震えた。

ベルトを外した。

ボタンを外した。

ジッパーを下げた。

パンツの中でちんぽがはねた。

外に出た。

ちんぽは半分以上硬かった。

亀頭が赤くなっていた。

亀頭の先が湿っていた。

御厨は見た。

すぐに触らなかった。
見る時間が長かった。

「ちんぽは正直ですね」

その言葉が耳に残った。

「上では違うと言っても、下のちんぽは硬い」

「やめてください」

「触ります　。熱を見ます」

手が来た。

冷たい指がちんぽの横を包んだ。

ちんぽがビクッと跳ねた。

「熱いです」

御厨の手が上下に少し動いた。

皮が引っ張られた。
亀頭が全部出た。
「亀頭がむけています。感じるとこうなるんですね」
「ちがっ」
指が亀頭の裏をなぞった。
一番弱い場所だ。

「ああっ」

腰が引けた。

でも手は離れなかった。

御厨はちんぽを握ったまま、もう片方の手で俺の乳首を触った。

右の乳首だ。

乳首をつまみながら、ちんぽをゆっくりしごいた。

乳首とちんぽが同時に来た。

頭が真っ白になった。

「乳首を触ると、ちんぽが硬くなりますね」

「そんな、ことは」

「今、硬くなりました。亀頭も大きくなっています」

乳首を強く押された。

ちんぽがまた跳ねた。

御厨は手を止めた。
ちんぽからは手を離さなかった。
「奥のほうまで熱いですか」
「奥って、どこですか」
「ちんぽの付け根です。腹の奥です」

手が付け根まで下りた。
玉袋の横を押された。
腹の奥が重くうずいた。

尻には触られなかった。
指も入らなかった。
でも奥がうずく感じは止まらなかった。

御厨は立ち上がった。
俺の後ろに回った。

背中に手が当たった。

肩甲骨。

背筋。

腰。

「手入れは後ろからも見ます。姿勢が崩れています」

腰に手が置かれた。

ズボンが少し下がった。

尻の上のほうが空気に触れた。

御厨は俺を机のほうへ向かせた。

「机に手をついてください。馬の脚を見る時の姿勢です」

俺は机に両手をついた。

上半身が前に倒れた。

背中が丸くなった。

御厨の手が背中を押した。

「もっと腰を落としてください」

腰を落とした。

ズボンの布がちんぽに擦れた。

ちんぽがまた痛いほど硬くなった。

亀頭がパンツに当たって、ぬるっとした。

先から出た液が布についた。

御厨は後ろから俺の脇を触った。

脇から胸へ手が回った。

両方の乳首を後ろからつままれた。

「あっ、あ」

乳首を引っ張られた。

乳首が伸びる感じがした。

痛さと熱さが一緒になった。

「手入れの時、馬が嫌がれば手を止めますか」

「止めません。なだめながら続けます」

「では私も続けます」

乳首を離したかと思うと、今度は前から回り込んだ。

右の乳首を指で転がした。

左の乳首を爪の先で軽く弾いた。

乳首、乳首、と頭の中でその場所だけが大きくなった。

他のことは考えられなかった。

朝のカードのこと。
館林のこと。
伏見のこと。
全部遠くなった。

残ったのは乳首の熱と、ちんぽの重さだけだった。

御厨は俺の前にしゃがんだ。
顔がちんぽの近くに来た。
息が亀頭にかかった。

「ここまで硬いと、測りやすいです」

指でちんぽの長さをなぞった。

根元から亀頭まで。

亀頭の縁をぐるっと触った。

亀頭の先の穴を親指で押した。

液がにじんだ。

「先から出ています」

「出すつもりは」

「体はつもりとは別です。ちんぽの先、亀頭の奥から出てきている」

亀頭を握られた。

ぎゅっと握られた。

奥のほうがずんと重くなった。

ザーメンが出そうな感じが腹の奥まで上がってきた。

「出してはいけません。今日は確認だけです」

その言葉で止められた。

手が止まった。

ちんぽは握られたままだった。

出そうで出せない。

奥が何度も波打った。

俺は机に額をつけた。
汗が机に落ちた。
「やめて、ください。出ます」
「我慢してください。手入れは我慢の仕事でしょう」
乳首をもう一度強くつままれた。
ちんぽが跳ねた。
亀頭が震えた。

でもザーメンは出なかった。
寸前で止まった。

御厨はゆっくり手を離した。
ちんぽからも、乳首からも手を離した。

俺の体は汗で湿っていた。
胸も腹も汗だらけだった。
乳首は赤く腫れたように立っていた。
ちんぽはまだ下を向かなかった。

亀頭は濡れたまま光っていた。

御厨はタオルを渡した。

「汗を拭いてください。手入れの後は体を冷やさない」

俺はタオルで胸を拭いた。

乳首にタオルが当たると、またビクッとした。

乳首がこんなに弱い場所だとは知らなかった。

三十七年、知らなかった。

御厨は椅子に戻った。
カードに数を書くふりをした。
何を書いているのかは見えなかった。

「今日分かったことがあります」

「何ですか」

「あなたは乳首を触ると声が出る。ちんぽはすぐ硬くなる。亀頭の裏が一番弱い。腹の奥まで我慢はできるが、長くは持たない」

一つ一つ言われた。
全部当たっていた。
恥ずかしさで顔が熱くなった。

「それが手入れの癖と何の関係が」

「関係は私が決めます。明日は署名をしてもらいます。今日されたことを、自分の言葉で書いてもらいます」

「書くんですか」

「短い言葉でいい。乳首を触られた、ちんぽを握られた、それでいい」

想像しただけで下腹が重くなった。

自分の手でそんな言葉を書く。

署名までする。

御厨はペンを置いた。

「ここまでです」

俺は息が荒かった。

ちんぽはまだ硬かった。

亀頭は濡れていた。

乳首は両方立っていた。

乳首の先がひりひりした。

御厨はもう一度カードを取った。

何か書き足した。

「今日の再検査は終わりです。数値は記録しました」

「何を書いたんですか」

「胸の熱。乳首の反応。ちんぽの硬さ。全部、明日の確認に使います」

「そんな記録、誰が見るんですか」

「私だけです。今は」

シャツを渡された。

俺は急いで着た。

ボタンをかけ違えた。

直した。

ズボンの前も閉めた。

ちんぽはまだ収まらなかった。

前を押さえてごまかした。

御厨は鍵を開けた。

「明日も同じ時刻に来てください。立ち合い署名がまだです」

「署名」

「今日の検査には、あなたの署名がありません。署名がない検査は無効です。明日、署名の仕方を教えます」

ドアが開いた。
夜の厩舎は静かだった。
セトノカゼの馬房から、鼻を鳴らす音が聞こえた。

俺は道具部屋を出た。
脚が重かった。
乳首がシャツに擦れて痛かった。
ちんぽの先がまだ熱かった。

セトノカゼの前に立った。

セトノカゼは俺を見た。
何も知らない顔だった。

左前脚のことは言っていない。
それだけは守った。

でも他のことは、全部見られた。

明日も行かなければならない。
カードの印があるからだ。

そう思った。
本当は、それだけではない気もした。

その気は、腹の奥に残っていた。

俺は馬房の前で深く息をした。
セトノカゼに水をやった。
手がまだ震えていた。
バケツの水が揺れた。

セトノカゼは水を飲んだ。
耳を動かした。
いつもと同じだった。

馬は嘘をつかない。
熱があれば熱い顔をする。
痛ければ脚をかばう。
隠すのは人間だけだ。

俺は今日、数を隠した。
その代わりに、自分の体を全部見られた。
乳首の弱さも、ちんぽの硬さも、亀頭の感じやすさも、全部だ。

宿舎に戻る道で、伏見とすれ違った。

「主任、夜までお疲れさまです。セトノカゼ、明日は大丈夫そうですか」

「ああ。大丈夫だ」

「御厨さん、厳しい人ですね。でも主任のことをよく見てました。手入れが丁寧だって、館林先生に言ってましたよ」

俺は答えられなかった。

見ていたのは手入れだけではない。

でも伏見には言えない。

「もう休め。明日も早い」

「はい。おやすみなさい」

伏見は走って行った。

若い脚音が遠くなった。

部屋に戻ってシャツを脱いだ。

鏡に胸が映った。

乳首がまだ赤かった。

指で触ると、乳首がすぐ硬くなった。

さっきの指の感覚が戻ってきた。

シャワーを浴びた。
熱い湯が乳首に当たった。
それだけで下が重くなった。
ちんぽに湯がかかると、亀頭が熱くなった。

俺は壁に手をついた。
今日のことを思い出すなと言い聞かせた。
でも体は覚えていた。
首筋の指。

胸の手のひら。
乳首をつまむ力。
ちんぽを包む冷たい手。
亀頭の裏をなぞる動き。

腹の奥がまたうずいた。
ザーメンは出していない。
出させてもらえなかった。
その分が体に残っている感じがした。

明日、署名をしろと言われた。
されたことを書けと言われた。
書けるわけがないと思った。
書かなければカードの印は消えないとも思った。

ベッドに横になった。
天井を見た。
乳首がシーツに擦れた。
その小さな擦れでも、ちんぽが反応した。

情けなかった。

三十七にもなって、乳首とちんぽに振り回されている。

それでも、左前脚の古傷のことは言わなかった。

明日も言わない。

明後日も言わない。

そこだけは譲らない。

そう決めて目を閉じた。

目を閉じても、御厨の小さい声が残っていた。

数値を書いてください。
署名をここに。

明日も、その声に従う自分が見えた。

第2話　署名欄

朝、四時半。
厩舎の明かりをつけた。

体が重かった。
昨夜はよく眠れなかった。
乳首がシャツに擦れるたびに目が覚めた。

セトノカゼの馬房へ行った。
セトノカゼは立っていた。
目が澄んでいた。
飼い葉をねだった。

体温を測った。
三十七度八分。

平熱だ。

俺はカードに正しく書いた。

三十七度八分。

一字ずつ、ゆっくり書いた。

手は震えなかった。

昨日のことが頭にあった。

御厨の声が残っていた。

数値を書いてください。

左前脚には触れなかった。
いや、触れた。
表のほうだけだ。
いつもの手入れの範囲だけだ。
古傷の場所には触れなかった。
見もしないようにした。

あの場所と程度は、俺しか知らない。
今日も言わない。

六時、読み合わせ。
館林がカードを読んだ。

「セトノカゼ、三十七度八分。平熱に戻ったな」

「はい」

「今日は出走前検査、通常通りだ。柊庭、立ち合いを頼む」

「はい」

御厨は後ろの席にいた。

何も言わなかった。

カードを見るだけだった。

俺の書いた数字を見ているはずだった。

伏見が小さい声で言った。

「主任、よかったですね。セトノカゼ」

「ああ」

平気な顔をした。

昨夜、道具部屋で何があったか、伏見は知らない。

乳首を触られたことも、ちんぽを握られたことも知らない。

知られてはいけない。

伏見は笑った。

「主任はいつも落ち着いてますね」

落ち着いてなどいなかった。
下腹の奥がまだ重かった。
ザーメンを出していない分が残っている感じだった。
乳首も、少し触れただけで硬くなるようになっていた。

朝の手入れが始まった。
ブラシを取った。
セトノカゼの首から背へかけた。

ブラシが体をなでる音。

シャッ。

シャッ。

昨夜、俺の胸に当たったブラシと同じ音だった。

手が止まりそうになった。

止めなかった。

伏見が見ていた。

「主任、今日のセトノカゼ、毛づやがいいですね」

「そうだな。よく寝たんだろう」

「主任は寝不足の顔ですけど」

「気にするな」

平気な顔で言った。

伏見はうなずいて、次の馬房へ行った。

昼、出走前検査があった。
御厨がセトノカゼを見た。
体温、心音、脚の動き。
全部通常だった。

「出走できます」

館林がほっと息をついた。
俺も息をついた。

御厨はカードを俺に返した。

立ち合い署名の欄が空だった。

「ここが空いています」

「昨日の分ですか」

「昨日の分も、今日の分もです。立ち合い署名がない検査は無効です」

「無効って、出走は認めたじゃないですか」

「出走は今日の数値で認めました。昨日の再検査は、署名がないので記録としては残りません」

「じゃあ、昨日の夜は」

言いかけて止めた。

昨夜のことを昼の厩舎で言えるはずがなかった。

御厨は声を落とした。
俺にだけ聞こえる声だった。

「残したいなら、署名をしてください。今夜、道具部屋で」

「署名の仕方を教える、と言っていましたね」

「はい。されたことを短い言葉で書く。まずは練習です」

顔が冷たくなった。

「そんなものを書いたら、誰が見るんですか」

「署名欄の横に書く欄があります。私が確認します」

御厨はそれだけ言って行った。

午後、セトノカゼはレースに出た。

三着だった。

悪くない結果だった。
脚も熱を持っていなかった。
帰ってきたセトノカゼの体を冷やした。
水をかけた。
脚を洗った。

その間も、今夜のことが頭から離れなかった。

書く。
乳首を触られたと書く。

ちんぽを握られたと書く。
自分の字で書く。
署名もする。

想像するだけで耳が熱くなった。

夕方、伏見が道具部屋の前で声をかけた。

「主任、このブラシ、戻しておきました」

「ありがとう」

「あと、御厨さんが言ってました。今夜も二十時に道具部屋だって」

「聞いている」

「毎晩大変ですね。検査ってそんなに厳しいんですか」

「大事な馬だからな」

平気な顔をした。
声も普通に出した。
伏見は何も疑わなかった。

「セトノカゼのためなら、主任はなんでもしますもんね」

その言葉が胸に刺さった。
なんでも、ではない。
一線はある。

左前脚のことは言わない。
それ以外が、少しずつ崩れているだけだ。

二十時。
道具部屋の明かりがついていた。

俺は入った。
ドアを閉めた。

カチッ。

御厨が鍵をかけた。

机の上に紙が何枚か置いてあった。

検査カードの練習用の紙だった。

線の横に、署名欄があった。

「座ってください」

座った。

ペンを渡された。

「まず、名前を書いてください」

柊庭鷹久と書いた。

「次に、昨日の日付を書いてください」

書いた。

「次に、昨日の検査の内容を短く書いてください」

手が止まった。

「内容とは」

「されたことです。胸を触られた。乳首を触られた。ちんぽを握られた。短くていい」

やっぱりそれだった。

「書けません」

「書けないなら署名はできません。署名がない検査は無効のままです」

「無効でもいい。昨日のことは」

「無効なら、朝の食い違いの印も消えません。再検査を繰り返します。毎晩です」

ペンを持つ手に汗が出た。

書いた。

胸をさわられた。

字が汚かった。

「次を書いてください」

乳首をつままれた。

書いた。

乳首、と自分の字で書いた。

見るだけで顔が熱くなった。

「次です」

ちんぽをにぎられた。

ちんぽ、と書いた。

ちんぽという字を、仕事の紙に書いたのは初めてだった。

「亀頭をさわられた、も書いてください」

亀頭をさわられた。

書いた。

「最後に、どう感じたかは書きません。事実だけです。よく書けました」

ほめられた気がして、余計に恥ずかしかった。

御厨は紙を取った。

一枚ずつ見た。

うなずいた。

「では今日の検査を始めます。署名は最後にしてもらいます」

「今日は何をするんですか」

「手と腕と首筋です。手入れの段取りで確認します」

御厨は立った。

俺も立った。

「右手を出してください」

出した。
御厨は俺の手のひらに自分の指を置いた。
指の腹。
親指の付け根。
手首の内側。

「手入れの最初は手です。馬の体温は手で読む」

指が手首を押した。
脈の場所だ。

ドクドクと鳴っていた。

「脈が速いです」

「緊張しています」

「正直でいい」

左手も同じように見られた。

指を一本ずつ曲げられた。

爪の先まで触られた。

次は腕だった。

袖をまくらされた。

昨夜と同じだ。

肘の内側に指が当たった。

二の腕を包まれた。

「腕の内側は柔らかい。馬の脚の内側と同じです」

指が肩まで上がった。

肩の骨。

鎖骨のくぼみ。

首筋。

首筋に指が触れた途端、体が跳ねた。

ビクッ。

「首筋は弱いですね」

「そこは、手入れとは関係ないでしょう」

「馬の首筋を触る手つきを見るんです」

御厨の指は首筋を下から上へなぞった。

耳の下。

あごの裏。

喉の横。

息が詰まった。

首筋を触られると、下腹が反応した。

ズボンの中でちんぽが動き始めた。

首筋とちんぽがつながっているような感じだった。

「首筋だけで、ちんぽが硬くなりかけています」

「見ないでください」

「検査です。見るのが仕事です」

御厨は俺の前に立った。

シャツのボタンを上から外した。

首筋から胸の上まで開いた。

昨夜腫れた乳首が見えた。

まだ少し赤かった。

「乳首は昨日のままですね。今日は乳首は中心ではありません」

そう言いながら、指先は乳首に一度だけ触れた。

乳首がすぐ硬くなった。

「反応は記録します。乳首、すぐ立つ」

「書かないでください」

「口で言いました。紙には後で自分で書いてもらいます」

首筋に戻った。
今度は口が近かった。
御厨の息が首筋にかかった。
熱い息だった。

「手入れでは、馬の息も聞きます。人の息も聞きます」

首筋に唇が触れた気がした。
触れたのか、触れていないのか分からない近さだった。
首筋の皮膚が全部立った。

ゾクゾク。

腕をつかまれた。

俺の右手を、御厨は自分の首筋へ持っていった。

「今度はあなたが触ってください。手入れの手つきで」

「御厨さんを、ですか」

「確認です。どう触るか見ます」

俺の手が御厨の首筋に触れた。

冷たい皮膚だった。

脈が俺の指の下で打っていた。

「力が強い。もっと弱く」

手を滑らせた。

耳の下まで行った。

御厨は目を細めた。
何も言わなかった。
顔からは何も読めなかった。
分からないまま、手だけが動いた。

「上手です。では下も確認します」

手が離れた。
御厨は椅子に座った。

「ズボンの前を開けてください」

まただ。

昨夜と同じ言葉だった。

体が先に覚えていた。

手がベルトへ行った。

開けた。

ちんぽはもう半分硬かった。

パンツから出すと、亀頭が顔を出した。

亀頭は昨夜より敏感だった。
空気に触れただけで痛いほどだった。

「首筋でここまで硬くなるんですね。ちんぽは素直です」

御厨の指がちんぽを包んだ。
ゆっくり上下した。
皮が動き、亀頭が全部むけた。
亀頭の裏を指がなぞった。

「あっ」

昨夜と同じ場所だ。

弱い場所を、もう覚えられていた。

「今日は口も使ってもらいます」

聞き間違いかと思った。

「口ですか」

「あなたの口です。手入れでは口で合図を送ることもある。今日は導入だけです」

御厨は自分のズボンの前を開けた。

中からちんぽが出た。

俺のより太くて、長かった。

亀頭が大きく張っていた。

俺は見てしまった。

目が離せなかった。

「しゃがんでください」

しゃがんだ。

膝が床についた。

顔の前に御厨のちんぽがあった。

亀頭が俺の唇のすぐ近くだった。

「口を開けてください」

開けられなかった。
口が震えた。
「導入だけです。先だけです。できなければ、署名は今日もできません」
署名。
カード。
印。

俺は口を開けた。
小さく開けた。

御厨の手が俺の頭の後ろに来た。
強くは押さなかった。
待つ手だった。

俺は顔を近づけた。
唇が亀頭に触れた。

熱かった。
皮膚は柔らかかった。
亀頭の先が唇を押した。
「舌を出してください」
舌を出した。
亀頭の先を舌で舐めた。
塩っぽい味がした。

先から出た液の味だった。

ビクッと御厨のちんぽが跳ねた。

俺の口の中で、亀頭の先だけが入った。

大きくて、舌の上に重かった。

奥までは入らなかった。

先だけだった。

それでも口いっぱいだった。

「そのまま止まってください」

止まった。

口に亀頭を入れたまま、俺はしゃがんでいた。

よだれが唇の端から垂れた。

あごが疲れた。

自分のちんぽも硬くなっていた。

床に膝をついた姿勢で、ちんぽがズボンから出て揺れていた。

乳首もシャツの中で立っていた。

首筋の感覚がまだ残っていた。

情けない姿だった。

でも口を離せなかった。

御厨の手が俺の乳首に伸びた。

シャツの上から乳首を押した。

乳首が潰れる感じがした。

口の中の亀頭がもっと大きく感じた。

「んっ」

声が漏れた。

口を使っているのに声が出た。

その時だった。

コンコン。

ドアがたたかれた。

俺の体が固まった。
口に亀頭が入ったままだった。

「主任、いますか」

伏見の声だった。

御厨は動かなかった。
手も離さなかった。

俺の頭の後ろの手もそのままだった。

小さい声で御厨が言った。

「返事をしてください。平気な顔で」

口を離すことは許されなかった。

いや、離せば音がする。

離さなければ返事ができない。

御厨がゆっくりちんぽを引いた。

唇から亀頭が抜けた。
糸を引いた。

俺は息を整えた。
口を袖で拭いた。
立ち上がった。
ズボンの前を慌てて閉めた。
ちんぽを押し込んだ。
痛かった。

ドアのほうへ声を出した。

「伏見か。どうした」

普通の声で言えたか分からない。

自分では普通に言ったつもりだった。

「館林先生が、明日の朝の飼い葉のことで確認だそうです。終わったらでいいって」

「分かった。検査が終わったら行く」

「はい。お疲れさまです」

足音が遠ざかった。

俺はドアにもたれた。

膝が震えた。

口の中にまだ味が残っていた。

亀頭の重さも残っていた。

平気な顔で返事をした。
伏見は何も気づかなかった。
それが一番きつかった。

御厨はズボンを直した。
何事もなかったような顔だった。

「よく返事ができました。記録します」

「今のは、記録するんですか」

「返事ができたことだけです」

御厨は机の紙を俺に渡した。

「今日の分を書いてください」

ペンを持った。

手が震えた。

書いた。

手と腕をさわられた。

首筋をさわられた。

乳首にさわられた。

次が書けなかった。

「口のことも書いてください。短く」

口でさわった。

そう書いた。

やったことは、もっとだった。

亀頭を口に入れた。

舌で舐めた。

でも短く書けと言われたから、短く書いた。

最後に署名をした。

柊庭鷹久。

練習用の紙の下に、はっきり書いた。

御厨は紙を受け取った。

署名の欄を指でなぞった。

「これで昨日の分も有効にできます」

「本当ですか」

「私がそう扱います」

鍵が開いた。

ドアが開いた。

俺は道具部屋を出た。

口を何度も手の甲で拭った。

味は消えなかった。

首筋がまだ熱かった。

乳首がシャツに当たって痛かった。

ちんぽは収まっていたが、奥の重さは残っていた。

廊下で館林に会った。

飼い葉の話を聞いた。

平気な顔で答えた。

数字も間違えなかった。

それが今日の俺の仕事だった。

昼の顔と、夜の口と、両方を同じ日にやることだった。

セトノカゼの馬房に寄った。
セトノカゼは眠そうだった。
左前脚のことは、今日も言っていない。
御厨は聞いてきた。

検査の前に、一度だけ聞いたのだ。

「セトノカゼの左前脚、昔の傷はどのあたりですか」

俺は答えなかった。

「脚は今日も問題ありません。それだけです」

御厨はそれ以上聞かなかった。

代わりに俺の首筋を見た。

見られた首筋が、熱くなった。

言わない一線は守った。

でも署名はした。

されたことを自分の字で書いた。

口まで使った。

部屋に戻る前に、洗い場で口をすすいだ。
水を何度も含んだ。
吐いた。
また含んだ。
それでも舌の奥の味は消えなかった。
亀頭の形が舌に残っている感じがした。
唇も少し腫れていた。
鏡はなかった。

よかった。
今の顔を自分で見たくなかった。

手も洗った。
今日、御厨の首筋を触った手だ。
指先にまだあの脈の感じが残っていた。
腕も洗った。
首筋も洗った。
水が首筋に当たると、御厨の指を思い出した。
首筋から下腹へつながる感じが、また戻ってきた。

乳首も立った。
水をかけたくらいでは収まらなかった。

俺はタオルで顔を拭いた。
明日も伏見の前で普通にしなければならない。
館林の前でも普通にしなければならない。
セトノカゼの前では、いつもの主任でなければならない。

できるのかと思った。
今日はできた。

ドアの向こうの伏見に、普通の声で返事ができた。
口を使った直後だったのに、できた。
それが怖かった。
慣れていく自分が怖かった。

署名のことも思い出した。
自分の名前を書くのは仕事で何度もやってきた。
でも今日は違った。
されたことを書いた下に名前を書いた。
胸をさわられた。

乳首をつままれた。
ちんぽをにぎられた。
亀頭をさわられた。
口でさわった。
その全部に、俺が署名したことになる。

紙は御厨が持っている。
明日も明後日も、あの紙は残る。
俺の字で残る。

消したいと思った。
同時に、消えたら検査が無効になるとも思った。
無効になれば、朝の食い違いがまた戻ってくる。
戻ってきたら、セトノカゼが出られなくなるかもしれない。
厩舎の評価も下がる。
館林にも迷惑がかかる。
伏見も困る。

だから署名は必要だった。
自分にそう言い聞かせた。

そう言い聞かせれば、口を使ったことも仕事の一部になる気がした。

本当は違うと分かっていた。

首筋を触られた時、ちんぽが硬くなったのは仕事とは言えなかった。

乳首を押された時、声が出たのも仕事とは言えなかった。

亀頭を口に入れた時、舌が自分から動いた瞬間があった。

あれは仕事ではない。

腹の奥が重かった。

今日もザーメンは出していない。

自分のちんぽは硬くなって、収まって、また思い出して硬くなった。

出す場所がないまま、体だけが覚えていく。

宿舎の部屋に戻った。

ベッドに座った。

首筋を自分で触った。

さっきの御厨の指より、自分の指は下手だった。

何も感じなかった。
御厨の指の時だけ、体が跳ねた。

乳首も触った。
すぐに硬くなった。
乳首はもう昨日の前とは違っていた。
少し触れば立つ。
シャツが擦れれば立つ。
思い出せば立つ。

ちんぽも触った。
亀頭を包む皮を下げた。
亀頭の裏に指が当たると、口の中のことを思い出した。
今度は俺が舐められたわけではない。
俺が舐めたのだ。
その違いが頭の中でぐるぐるした。

手を止めた。
今日はここまでだと思った。
明日、御厨に何をされるか分からない。

分かるのは、装鞍所は人が多い場所だということだ。
人がいる場所で、声を出せない検査をされるのだろう。
伏見もいる。
館林もいる。
客も来る。

その中で平気な顔をする。
今日できたように、明日もするのだろう。

寝る前に、もう一度だけセトノカゼの様子を見に行った。

夜の厩舎は静かだった。
他の馬は横になっていた。
セトノカゼは立ったまま、目を閉じかけていた。

俺は飼い葉を少しだけ足した。
水も新しいのに換えた。
誰も見ていなかった。
見られていないと、少しだけ息ができた。

セトノカゼが俺の肩に鼻を寄せた。

温かい息が首筋にかかった。

さっき、御厨の息がかかった場所と同じだった。

体が一瞬固まった。

でもこれは馬の息だ。

仕事の息だ。

そう思って首筋を動かさなかった。

「明日も頼むな」

小さい声で言った。

セトノカゼは耳を動かした。
答えたように見えた。

お前のためなら、と言いかけた。
伏見の言葉を思い出した。
なんでもする、ではない。
一線はある。
でも一線の内側が、今日また一つ広がった。
署名と、口と、平気な顔と。
明日はどこまで広がるのか分からない。

俺は馬房を出た。
夜風が首筋を冷やした。
乳首がシャツの中でまだ少し痛かった。
口の中の味は、やっと薄くなっていた。

でも舌の奥には、亀頭の形がまだ残っていた。
明日も、この口のまま装鞍所に立つ。

ほかの作品はサークルページから

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01054794.html

奥付

作品名　検査カードの数値の食い違いを不問にする代わりに、監視カメラの真下で確認を受けて、署名した検査結果が朝の読み合わせで読み上げられ、検査が終わったあとも自分の手で専属の名簿に名前を書いて、道具部屋の合鍵を一つ渡したままの厩務主任の俺

サークル　タビューへ

発行日　２０２６・１１・１２

レーティング　Ｒ１８